植柳の風

八代市立植柳小学校　校長室便り
平成３１年１月８日　ＮＯ．１２１

今年の漢字「節」

皆様、明けましておめでとうございます。どうぞ、今年もよろしくお願いいたします。

さて、ここからはいつもの「植柳の風」風に書き綴っていきたい。

２０１９年、新しい年が幕を開け、多少寒い日もあったが、まずまずのお天気で正月三が日も過ぎた。各ご家庭でもいい一年のスタートが切られたことと思う。のっけから私毎で恐縮だが、実は昨年の大晦日から体調を崩してしまい、寝正月となってしまった。元旦早々に運転してもらって病院を訪れたものの、なんと２時間待ち。後ろ図去りしながら待合室を出て、薬局で薬をいただいて三日間床に臥せてしまった。体の節々が痛かったから（笑）というわけではないが、今年の漢字として思い浮かんだのが、標題の「節」という字である。そう、今年は、平成最後の４か月という大きな時代の節目を迎える年。私自身、昭和、平成、そして〇〇という三つの元号の時代を生きることを意味しており、教職を３月に終えるという節目の意味も重ね、今年はこの「節」という漢字にこだわっていきたいと考えた。

「節」と言えば、「竹」を思い起こす。本校職員玄関前にも竹林があるが、一日に１ｍも伸びることがあるという竹は、簡単なことでは折れないなど、非常に強い生命力を持っている植物である。その秘密は、一つ一つの「節」にある。このたくさんの「節」があるから、しなやかにしっかりと幹を支えることができるのである。

「節」を使った漢字を見ても、子どもが大きくなっていくときに行う祝い事の「節句」、大寒、小寒などの季節の区切りは「節季」、今日の３学期のスタートも一つの節目である。「節目」を大切にすることは、これまでの自分を振り返るとともに、次の新たなスタートに向けて気持ちを切り替える意味があり、そのことで「しなやかな強さ」を身につけることができることを昔の人は教えてくれている気がする。そういえば、授業の開始前後にきちんと礼をしてけじめをつけることも「礼節」と呼ばれる。私たち日本人は、「節」という言葉と深くかかわって生きているのだと改めて思った。

７日、八代市公民館で開催された年頭研修会の講師は、日本こどもみらい支援機構代表の武藤杜夫氏。「なぜ、少年院で人生が変わるのか？」と題した講演を拝聴した。非行に走り、荒れた少年時代を過ごした武藤氏が法務教官となり、沖縄の少年院で出会った様々な少年少女たちと生活指導、職業指導、教科指導、体育指導を行なってきた体験を語られた。普通の学校と違うことの一つに、「魂の交流」を挙げられた。２４時間、一緒に寮で寝泊まりし、勉強はもちろん、一緒に汗を流し、苦しみ、一人一人の自分の人生について本音で語り合い、本気で向き合う仕事であることを伝えられた。そして、「俺なんか死んだほうがいい」などとつぶやく彼らに、一人一人の命はたくさんの祖先によって受け継がれてきた奇跡の命であり、自分の命の大切さとともに、他者の命を大切に思う心を培うことを訴え続けてきたことを熱く語られた。最後に、武藤氏は「ダメな人なんていない。個性的な表現力、すぐに行動に移す実行力、ちょっとのことではへこたれない継続力、彼らはすごいんです。子どもの可能性を信じることで私が逆に学ぶことが多かった。だから、皆さんの期待を裏切るようですが、一番少年院で人生が変わったのは私自身でした。」と結ばれた。年頭のいい「節目」となった研修会だった。